戰果に應へてかく誓ふ

高邁な理想に生く　　新東亞の文藝復興へ

大東文学者大會會議四日の第一日のお休み、相應しく大東會四の控では、集ひ會した日、滿、の文人客三百名が文國の気に充ちた雰気の中で笑してゐた。その一に屯した五人――錢稻孫氏（中國）久米正雄氏、古丁氏（滿）呉瑛女（滿）光洙氏（半島）

　　　　　　　　　　　　　　　　　◇

『古丁さんのいはれるやうにわれわれ朝の文人も非從しなければならないと思つてゐます』といつてゐるのは光洙氏、香山春といふ名をもつてゐる人

『今度の爭は上にない最も高いのための爭だ、先ごろの南太平海の大にしても、このを余すところなく発したものだとふ、その高な神に追従しうるだけの文學をわれわれはもたなければならないのだ、爭に従してその高な神を把することにより、はじめてに大東神を実した作品も生まれるのだと思ふ』

『さうなんだ、前に行けないらには建な後の生活を描くにも何か不安心だ』

『従すれば自信をもつて強い良いテーマが描けると思ふ、それには北辺の護りを主題としたものが滿國には一番相應しいのだからこの方面へらをしてくれゝば有いが』

うむうむと大學の校長錢稻孫氏がうなづき久米氏がれるばかりの古丁氏の若い熱をたのもしげに見やる。

『さうすれば』と古丁氏が、國はちがつても心にばれた二人の大先の前でちよつとかしさうに

『滿國民に自分らこそ北の護りとなるのだといふを強く植ゑつけることも出來るのです』

つて聞いていた呉瑛さんが面映ゆさうな低めの滿語でこの古丁氏に何かいつた。

『呉瑛さんは日本語が巧く話せないのです。僕が通譯します…從來の滿國女は必ずしもよくくとはいへませんでした――けれども大東爭をとして……滿の女の生はすっかりつて參りました……それには爭にする日本人の立な度がしてゐるのです……このいゝ向を々助長して……にある滿の女生を昂めて……國家にまで引き上げねばなりません……さういふ私達滿の女流作家にとつては……大の基礎となつてゐる日本女のが……どんなものであるか知ることが一番手近な……そしてまた実な方法となります』

ぢつとしてゐた錢稻孫氏が重い口を開く

『この爭目は東の道義精神を西にまで及ぼさうとすることにあると思ひます。日本も滿も中国も文を通じてこの爭をふわれわれが、かうしてまり合ひ、みがき合つてに前進しようといふみには、誠に義いものがあります』

　　　　　　　　　　　◇

午後の會議を報らせるベルがこの時つた、ざわざわと會場へ向ふ議員たちの中で各々國をにするこの五人の人達だけは、新しき大東の文をふ一つの熱にざされてしばらくの間は身動きもしなかつた